



大阪商業大学 FDニューズレター

第19号

2019年 3月発行

C O N T E N T S

1	平成 30 年度 FD 研修会	2
2	平成 30 年度 公開授業及び意見交換会	2
2-1	開催概要	2
2-2	公開授業を終えて	3
	「マクロ経済学入門」湯川 創太郎（経済学部 経済学科 講師）	3
	「土地利用制度」西嶋 淳（経済学部 経済学科 教授）	4
	「教師論」宮坂 朋幸（総合経営学部 経営学科 准教授）	6
	「マーケティング戦略論」孫 飛舟（総合経営学部 商学科 教授）	7
	「経営診断論」村上 義昭（総合経営学部 経営学科 教授）	8
	「経営史」加藤 慶一郎（総合経営学部 経営学科 教授）	9
	「公共経営学特殊講義Ⅰ」古作 登（公共学部 公共学科 助教）	10
2-3	意見交換会報告	11
3	平成 30 年度 授業アンケート	12

1 平成 30 年度 FD 研修会

平成 30 年度の FD 活動の 1 つとして、9 月 26 日（水）16:30 から本館 6 階大会議室において、第 9 回 FD 研修会が開催された。会次第は以下のとおりである。

- 1 開会挨拶
- 2 講演「大学教育の質保証と FD 活動の推進－選ばれる大学になるために－」

株式会社エデュース コンサルタント 栗原 智氏

- 3 報告「本学教職協働の取り組み」 本学教務委員会委員長 松尾 俊彦教授

- 4 閉会挨拶

栗原氏による講演では、本学における FD 活動の推進と教職連携の深化に資するため、大学教育の質保証に関する事項を中心に、第 3 期教育振興基本計画の概要とポイントならびに要請事項について、事例を交えた解説が行われた。講演後は、松尾教授より、本学における教職協働の取り組みに関する報告があった。

2 平成 30 年度 公開授業及び意見交換会

2-1 開催概要

今年度は 6 月 25 日（月）～29 日（金）に公開授業を行った。日程、科目と担当教員、教室については以下のとおりである。公開授業の対象となる授業科目については、今年度の新任教員が担当するものの他、授業内容や受講者数等を考慮して選出した。

<公開授業実施日程・科目>

月日	時限	科目名	担当教員名	教室
6 月 25 日（月）	4	マクロ経済学入門	湯川 創太郎	425
6 月 26 日（火）	4	土地利用制度	西嶋 淳	423
6 月 27 日（水）	3	教師論	宮坂 朋幸	622
6 月 28 日（木）	2	マーケティング戦略論	孫 飛舟	421
	3	経営診断論	村上 義昭	421
	4	経営史	加藤 慶一郎	623
6 月 29 日（金）	2	公共経営学特殊講義 I	古作 登	441
	4	日本の住文化	加茂 みどり	631

各授業において、参観教員にアンケート（興味深い点や参考になった点などを自由に記述する形式）を実施した。また、7 月 4 日（水）16:30～17:30（於 本館 4 階会議室Ⅱ）に、公開授業に関する意見交換会を行った。

2-2 公開授業を終えて

以下は、公開授業担当教員による、公開授業を終えての意見や感想である。

「マクロ経済学入門」 湯川 創太郎（経済学部 経済学科 講師）

今回公開授業で担当したマクロ経済学入門は、経済学のうち、国の生産活動の把握（国内総生産）の定義や測定、景気変動の理由やその対応策など、国全体の経済の把握に関係する項目を学んでいく授業である。入学年、学部別に同名の科目が複数開講されているが、公開授業を行ったのは総合経営学部1回生配当（選択科目）の講義である。公開授業の回（10回目）では、マクロ経済の総需要や、需要の不足が不況の原因の一つとなるといった、テレビ



の経済ニュースでもなじみの深い概念や理論の紹介を行った。

私は博士課程修了後、本学に赴任するまで内外の複数の大学で働いてきたが、主な役割は研究（ポストドクター）であり、これまで任されてきた授業科目も特定のテーマに沿った小集団教育が多かった。複数の講義科目を毎週運営していくことは本年度の前期が初めてであり、教える立場でありながらも、授業を通して学ぶことは非常に多かった。

学んだこととして、とりわけ印象深かったのは、講義内容と学生の私語の関係で、学生にとって解りやすい説明をすると私語は少なくなり、やや難解になると私語が増え、落ち着かない学生も増える。本講義は登録学生数17名という少人数の講義であるが、少人数であるがゆえに授業内容への学生の反応がはっきりしており、さすがに公開授業での私語はなかったものの、普段の講義では時折騒がしくなることがあった。「説明が難解になって申し訳ないけど、静かに聞いてくださいね」と注意する一方で、「学生にとって解りやすい授業」とは何かを日々考えていく必要があった。

授業では、動画を活用するとともに、出来る限り時事問題を取り上げる事を心掛けた。動画については、講義への関心を深める事を目的に、講義内で2～5分程度の動画を紹介する機会を多く設けた。マクロ経済学入門の場合は、日々の経済ニュースの動画から、国による経済格差を知ってもらうために私が実際に途上国で撮影した動画まで、様々なものを紹介している。時事問題については、直近の話題を授業の内容に合わせて紹介する形式をとった。公開授業の際には、前の週に発生した大阪府北部地震に関連する、災害の被害額という話を説明した。こうした工夫については、毎回記入をお願いするコメントシートで感想を確認している。

このように常に工夫は心掛けているのだが、公開授業の回においては、このように授業を公開する事が初めてであったこと、15回の授業のうちにシラバスに記した項目を全て説明しなければならない、という考えにとらわれすぎてしまい、やや内容が堅苦しくなったことは否めない。もちろんシラバスに即した授業を行う必要はあるが、学生の既存の知識や得手不得手をつかみ取って授業を運営する事が重要であると考えられる。

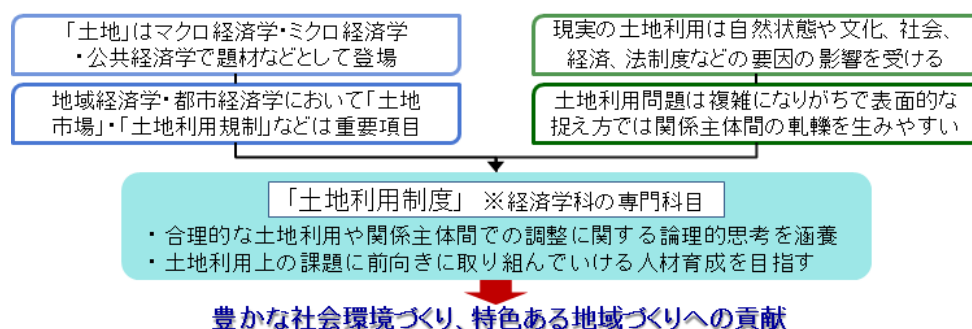
こうした機会を頂けたことに感謝しつつ、授業で頂いた意見を参考に、今後も教授法の改善に努めたい。

「土地利用制度」

西嶋 淳（経済学部 経済学科 教授）

＜授業の位置付けと概要＞

「土地利用制度」は、平成26年度に実施された主専攻科目にかかる履修モデルコース導入・カリキュラム改定の際に、経済学部経済学科において新設された専門科目で、その位置づけは次のとおりです。



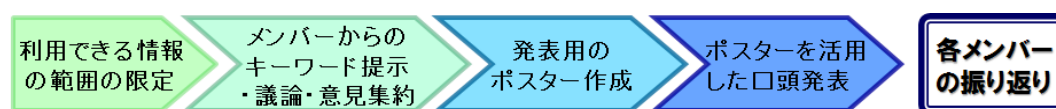
また、この授業の到達目標は次のとおりです。

- ・土地利用と社会、経済との関係を理解する
- ・わが国の土地利用に関する制度の概略を理解する
- ・わが国の土地利用に関する問題に興味を持つ
- ・グループワーク等を通じてものごとを多面的・客観的に捉える思考方法を身につける

授業の基本構成は、まず、土地利用と社会、経済との関係について解説していますが、土地利用に関する歴史や諸制度などの解説も加えて理解の深化を促しています。その上で、土地利用問題についての段階的な事例検討を通して、合理的な土地利用に向けての民間部門と公共部門の役割分担及び土地利用の調整のあり方について論理的思考を促しています。履修登録者数については、前々年度と前年度は150人超でしたが、今年度は100人強に落ち着きました。

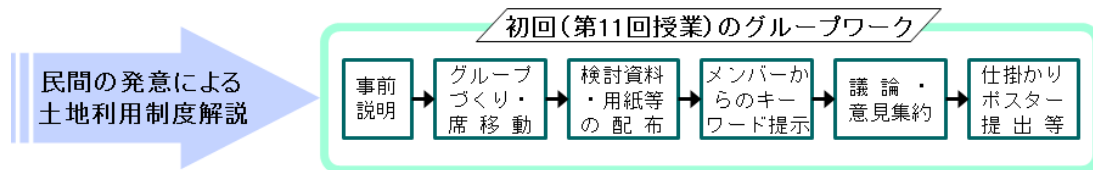
＜公開授業の内容＞

今回の公開授業は、次のような授業4回分を費やすグループワークによる事例検討の初回（第11回授業）が対象となりました。



このようなグループワークを導入した趣旨は、複数の関係主体の利害が絡み一筋縄では行かない現実の土地利用問題に関し、各関係主体の立場や考え及び多様性のあるグループの各メンバーの考えを尊重し、ものごとを多面的・客観的に捉えることの重要性に気づいてほしいからです。そのため、このグループワークは、目標到達に向けての手段の1つに過ぎないことを繰り返し説明しています。

今年度のグループワークのテーマは、前年度に引き続き、「世界文化遺産の緩衝地帯に位置する京都・下鴨神社の境内の一部でのマンション建設計画問題に公共部門はどう対処すべきであったか」としました。公開授業当日の授業の進行は次のとおりです。



<小括>

公開授業当日の出席者数は80名弱で、結局、13グループが編成され全グループが発表を行いました。一般的な専門科目で、かつ、この人数規模・グループ数のグループワークを1人のファシリテーターで補助者もなしで運営することに、参観していただいた先生方は少々驚かれていたようです。また、提示したテーマも結構難問で、グループワーク初回である当日は、特に出席者の反応にも相当バラツキがあり、心配もされていたようです。

しかし、この授業においては、グループワークは目標到達に向けての手段の1つであり、このようなグループワークの活用方法も許されるのではないかと考えています。



ちなみに、第14回授業で「グループワーク（第11回～14回授業）の振り返り」という課題を出していますが、出席者の9割強から提出があり、次のような内容を記述したものが多く見られました。

- 他のメンバーと話し合うことで様々な知識や考え方を知ることができて参考になった
- 他のグループの発表を聞いて気づけたこと、納得できることも多く参考になった
- テーマにかかわる様々な関係主体の立場、考え方の違いについて見つめ直す機会になった
- 景観問題、マンション建設問題に取り組むのは初めてで難しく感じたがやりがいもあった
- 授業、グループワークを通して景観問題に対する意識が高まった

また、期末定期試験では授業の到達目標に照応する論述式問題3問を出し、そのうち1問は設例に対する自身の考えを論述するものとしていますが、概ね題意に沿った解答が得られています。以上により、この授業の狙いは一定、達成されているのではないかと考えている次第です。

今後は、履修者に対し、土地や土地問題を取り扱う基幹科目や専門科目との関係性についてわかりやすく伝えるように心がけ、体系的な理解が進むように工夫を重ねて行きたいと考えています。

「教師論」

宮坂 朋幸（総合経営学部 経営学科 准教授）

今回、先生方に見学していただいた「教師論」（水4）は、教職課程の必修科目であり、1年次配当の導入科目でもある。学生たちの教育に対する目線を、生徒目線から教師目線に変え、教育について主体的に考えられるようになることを目指しているため、学習支援システム manaba を活用している。

まず、毎回使用するレジュメは事前に「コンテンツ」にアップし、学生自身でプリントアウトしてく



るよう指示した。これは、予習への意識を高めるため、また無駄紙の節約のために今年度から試行していることである。しかし、忘れてくる学生用に20部ほど教員側で準備していたため、それを見越してか、同じ学生が毎回レジュメを取りに来るという事態が発生した。公開授業当日にはその学生が数名、遅刻してきたため、講義が途切れることになった。この点、先生方からもご指摘をいただいたが、次年度からは、教員によるレジュメの印刷をやめ、学生には、予習をすること、授業には遅刻しないことを徹底したい。

また「アンケート」を利用して、15回中10回程度、講義内容に即した課題を提出させた。提出締切りは当日中（設定の都合上、23時55分まで）とし、学生たちがその日のうちに復習することを目指した。アンケート結果はエクセルの一覧表になるので、良く書けているものや気になったものについては背景の色を変え、個人情報や番号を消して、順番も提出時間順に並べ替えて誰が書いたものかわからなくした上で、「コンテンツ」にアップして学生と共有し、次の講義の開始後10分程度、プロジェクターで投影しながらコメントを返した。

今回のテーマは「体罰」であった。クラブ活動の経験を持つ事が多い本学の学生にとって「体罰」は比較的身近な問題である。その生徒目線を自覚させるために、前の回の課題を「なぜ体罰は絶対禁止なのか。もし体罰が容認されるケースがあるとすればどのようなケースか」とした。そして講義後の課題を「その考えが受講後にどう変わったのか」とし、自身の経験を相対化することを目指した。この方法は学生にも、先生方にも概ね好評であったようである。ただし、生徒目線では気づきづらい、学生にとっての新知識の獲得を目指して文字資料を多用したため、先生方からは、「文字を追いかける授業はつらい」「学生にとって難しい用語の説明が不足していたのでは？」「割と少人数（30名程度）で、学生も意欲的に見えたので、考えたり、話したり、発言する時間があっても良かったと思った」といったご意見をいただいた。内容を薄めることは難しいので、講義を2回に分けてじっくり考えさせるなど、今後改善していきたい。



「マーケティング戦略論」
孫 飛舟（総合経営学部 商学科 教授）

今年のFD公開授業において、私が担当する「マーケティング戦略論」を諸先生方に見学していただいた。授業当日、多くの先生方がご多忙にもかかわらず教室まで足を運んでいただき、また意見交換会の席で貴重なコメントを寄せていただき、紙面を借りて深く感謝を申し上げたいと思う。

「マーケティング戦略論」は商学科配置の主専攻科目のうちの「基幹科目」に位置付けられている。受講生は2年生以上となっており、基本的に商学科の学生を主な対象とし、1年生の時に「商学概論Ⅱ」で勉強したマーケティングの基礎をベースにさらにグレードアップした、より専門性の高い授業である。



私は8年ほど前までこの授業を担当していたが、後に大学院担当科目が増えたことで他の先生にバトンタッチすることとなった。今年度、再び担当することになり、受講生の内訳は、商学科の学生がほぼ半数を占め、他学科の学生も多数受講しており、総勢200人を超える授業となった。

授業では、私は「基幹科目」の性質上、これまで受講生が勉強したマーケティングのベースをしっかり踏まえながら、基礎理論の「展開」と「応用」に重点を置いて授業を進めていこうと考えた。しかし、実際に受講生の約半分は他学科の学生で、これまでマーケティングの基礎をほとんど学習してこ

なかった状況にある。それに鑑み、基礎的な部分を他学科の学生にも理解してもらえるよう、かみ砕いて説明してから、「展開」と「応用」に移っていくことを心掛けて授業の進行方法に工夫を重ねてきた。授業の内容をきちんと学生が理解したかどうか、不定期で小テストを実施して確かめている。さらに、今ではPPTを授業に用いることが標準化になりつつある中で、私はあえて板書にこだわっている。しかも、特に重要な部分、是非とも学生に頭に入れて復習する際に重点的に取り組んでもらいたい部分については、朱書きで板書している。この点は学生からの評価が非常に良く、今まで授業アンケートにも反映されており、今は私の授業スタイルの一つになっている。

改善点については先生方からもご指摘いただいております。例えば、「授業のスピードが少し遅い」とか、「スマホをいじっている学生を注意してほしい」など、これから受講生全体の理解度、授業への集中状況等に鑑みて適宜調整を行っていきたいと考えている。



「経営診断論」

村上 義昭（総合経営学部 経営学科 教授）

2018 年 4 月に大阪商業大学に赴任する前は金融機関に勤務していましたので、本格的に学生に講義を行うのは私にとって初めてです。このため、意見交換会でいただいたご意見や先生方の講義の進め方に関するコメントなどはとても参考になりました。

前期は、いろいろなことに迷いながらも講義を行いました。例えば、板書がよいのかパワーポイントスライドを投影するのがよいのか、レジュメは当日配布がよいのか manaba コースにアップロードするのがよいのか、説明に用いる事例は学生にとって理解できるものなのか、人数の多い授業をいかにコントロールすればよいのか、等々です。

今回の公開講義で対象となった「経営診断論」は受講者が 179 人とやや多いことから、印刷したレジュメは配布せず、投影するパワーポイントスライドからキーワード等を空欄にしたものを manaba コースにアップロードしています。出席者は平均 120～130 人程度、そのうち事前に manaba コースのレジュメを閲覧している学生は 80 人くらいでした。教科書、参考書を用いておらず、レジュメだけが学習資料であり、さらに期末試験でレジュメを持ち込み可にしていることを考えると、事前閲覧の割合が低いと思います。いかにして多くの学生にレジュメを手元において受講させるかは、今後の検討事項です。

講義では次の 3 点に配慮しています。第 1 点は、理論等を説明するだけでなく、理論を現実の事例（できれば私自身が経営者に会って調査した事例）に当てはめて説明することです。ビデオ教材があれば、



それも紹介しています。第 2 点は、同じテーマの講義の場合は前週の講義のエッセンスを復習していることです。かりに前週欠席していた場合でも、少なくとも論理のつながりが分かるようにと考えています。第 3 点は、当日の講義の要点をリアクションペーパーとして提出させるようにしていることです。これは最初からではなく、6 月頃から行うようにいたしました。ある先生がそうしているというお話を伺い、私の授業でも取り入れました。学生にとっては講義内容の定着を促しますが、それだけではなく、講師にとっても、ペーパーを読めば講義内容がどの程度理解されているのか、どこが理解しにくかったのかが分かります。後期にはこうしたフィードバックをもとに講義を進めていくつもりです。

意見交換会などで伺った先生方の工夫などを自分なりに取り入れながら、私の講義のスタイルを固めていきたいと考えています。



「経営史」

加藤 慶一郎（総合経営学部 経営学科 教授）

特に独創的な工夫をしているわけではありませんが、以下に個人的な経験を書かせていただきます。何かのご参考になれば幸いです。

＜パワーポイントの使用＞

パワーポイントは学内での教員向け講座を経て何とか使えるようになった。しばらくして授業でも使用し始めたが、応用の利く板書も捨てがたく、パワーポイントと同時併用していた。しかし、黒板とスライドの往復がせわしなく感じられ、馴染めなかった。



その後、タブレット用ペンの存在を知り、これならスライドへの書き込みが随時できるため、上記の問題の解消が期待された。実際、図表の説明などには有効であった。また、事前にスライドを作りこまずとも、臨機応変に記入できるため、進行が平板になりにくいように感じられた。しかも、黒板に大書せずとも、手元のタブレットに手書きすればよく、手の疲れがかなり軽減された。しかし、ペンがタブレット上で滑ることと、もともとの悪筆のため、投影された字は読みづらかった。期末の学生アンケートでもこの点の苦情をよく目にした。なお、現在はすべて板書で授業を行っている。

＜受講生との応答＞

出欠をカードで取っていた時期があった。良い質問が書いてあれば、加点するとともに次回に回答するという制度を設けた。本当に良い質問は自分にとっても勉強になり、そうでない質問も気になって調べることが少なくなかった。ある程度の効果はあったようだが、そもそも学生は他人の質問への回答にあまり関心がなく、下調べに時間がかかり過ぎるため、長く続けられなかった。

ここ数年は、冒頭に前回の復習をするようにしており、その際、一方的な説明では学生は聞き流すことが多いため、質問を投げかけ、回答者には加点するようにしている。質問の難易度は、ノートがあれば答えられる、ごく簡単な質問が大半である。しかし、結局は常連の学生が回答しがちなので改善の余地を感じている。

＜資料の配布＞

配布資料があると説明が容易になるが、配布に時間がかかり、情報量が多くなりがちなため、基本的に配布はしていない。数字を挙げて説明する必要がある時は、数字の数を減らし、大胆に四捨五入した数字を板書している。厳密性は犠牲になるが、授業の内容が一冊のノートにまとまるので、復習もしやすいのではと考えている。



以上、ささやかな工夫の一端を紹介させていただいた。今回、これまでの取り組みを振り返る機会をいただいた。今後も引き出しを少しずつ増やしていければと思う。

「公共経営学特殊講義Ⅰ」
古作 登（公共学部 公共学科 助教）

2018年6月29日、小職が今年から新たに担当することになった「公共経営学特殊講義Ⅰ」の第11回目の講義が、公開授業の対象として多くの教員の方にご覧いただく機会を得た。教員としても研究者としても駆け出し者ではあるが、精一杯務めさせていただいたつもりである。

当講義は「奈良時代以前から日本で遊ばれるようになった囲碁と、平安時代から広まり囲碁と並ぶ遊

びとして庶民にも広まった将棋の二大盤上遊戯を軸に、日本の歴史や文化をさまざまな側面から見ていく」ということをシラバスに掲げているが、それ以外の遊びや民間の風習も取り上げて、歴史と文化をよりわかりやすく学ぶことを主眼としている。教科書を用いず毎回プリントを用意するため、準備では資料を調べ、初年度は1コマにつき最低でも10時間はかけている。講義の終わった後は、学生たちの反応や理解度を加味しながらメモを基に次回、また次年度のより良い講義に向けての「復習」を行っている。

今年で5年目を迎える「知的ゲーミング演習」（バックギャモン、囲碁、将棋の実技習得とゲームの背景の理解）などは、初年度とくらべるとマイナーバージョンアップを繰り返し、プリントの内容や指導法はかなりの部分で進化したことを実感している。これは今年度2年ぶりに担当となった「遊戯文化史」も同様で、7年前に毎回30時間近くかけて作ったプリントは、当初無駄な力が入りすぎ冗長であった部分を省くことで、学生にとって多少なりとも理解しやすくなったと信じている。

私は本学に奉職する以前、主として遊戯関連のジャーナリストとして20年近く出版社に勤務していた。人との出会いに恵まれ、週刊紙や隔月誌・書籍の編集長を務めるのと並行して、社外のテレビ番組の司会や新聞、雑誌のコラムなども担当し、マスメディアに関する経験値はそれなりに積むことができた。現在でも筆が鈍らぬよう、新聞やウェブのコラムは継続している。今年春から担当している「ゼミナールⅡ」（頭脳スポーツとメディア・報道）では、学生に自分の経験を通じたノウハウを伝えている。

どの講義においても大切にしている基本は、「人はどう生きるべきか」という根源的なテーマに対し、学生が人生に向き合い自分なりの回答を得るためのヒントをつかんでもらうことである。私自身もこの重要な問いに対して自問自答し、学びを続けながら毎日半歩でも前に進むことを心がけている。



2-3 意見交換会報告

公開授業が行われた翌週の7月4日（水）に、公開授業に関する意見交換会が開かれた。参加者は公開授業担当教員、FD委員、公開授業参観教員の計15名であった。授業の進め方や参観教員によるアンケート結果を振り返り、参加者から以下のような意見や感想が出た。

【授業関係】

- ・教科書、レジュメ、板書を見せながら授業を進めているため、学生がどこを見たら良いのか、わかりづらい点が課題である。
- ・用語が難しいのは、必修科目であることを意識しているためである。今後検討したい。
- ・大教室でグループワークを行っている。専門を学ぶということではなく、客観的に位置づける事例検討を行うため、3回のワークショップ形式で実施している。
- ・グループワークは、学生が各自の意見を述べながらプロセスを踏んで行くという挑戦的な取り組みであった。グループになると、リーダーが出来る場合もあった。
- ・授業の進め方として、論点を絞ってキーワードを出す方が良いと思うが、指示した資料を読み込むために、1人3つのキーワードを出させ、何が問題なのかを探ることから始めた。
- ・積極的に参加しない学生、参加出来なかった学生に事後にコメントを書かせると、参加したかったと書く者がいる。
- ・授業中の発表では上手く出来なかった学生に、定期試験で記入する設問を与えると書いている。
- ・大教室でのグループワークは、後ろの席の学生やモチベーションの低い学生への対応が課題である。
- ・教職課程を履修している学生であるため、意欲的に授業に取り組んでいる。
- ・重要な知識や論点を修得できるような授業を心がけている。
- ・授業中に使用した、少し難解かと思われる言葉の概念については、2～3名の学生が理解出来ていなかったもので、後日説明した。
- ・私語は厳しく注意し、静かな授業をしている。
- ・学生の注意を引き付けるために、話す口調を工夫している。
- ・マナーを守らない学生には厳しく対処している。
- ・事例についてはケースを用意し、事例内容に沿った動画を見せ理解を促している。
- ・授業3回につき1回はレポートをまとめて書かせ、知識の定着を図っている。
- ・質問に答えた学生には、カードを渡して氏名等を記入してもらい、ボーナス点を加算している。
- ・本学の特色ある内容の授業のひとつで、担当教員が心から研究を楽しんでおられることが伝わってくる授業であった。自分の授業もそのようにありたいと思う。
- ・教室を静かにするのに、各担当教員の判断では対応がむずかしいため、学生への指導の基準をガイドラインとして示してもらえると有難い。



【資料関係】

- ・レジュメは行番号を付け、説明の際に見るべきページ数と行番号を指示している。
- ・今後は、学生が各自で空欄を埋められるレジュメを作成しようと考えている。
- ・昨年より manaba で、自分で印刷して資料を持って来るよう指示しているが、まだ途中で取りに来る学生がいる。
- ・レジュメはA3、1枚にまとめるよう気を付けている。
- ・資料は別に用意して、参照している。
- ・試験の際、自筆ノートやレジュメは持込み可としている。
- ・レジュメには書きこむ箇所を設けており、それをテキストとしている。
- ・レジュメは manaba に掲載してダウンロードするよう指示しているが、閲覧状況を見ると6割程度である。あとの4割はレジュメを持参していない。
- ・配布資料は無い。資料を配るくらいなら板書しようと思い、板書をしている。
- ・板書をしながらの授業はスピードが早すぎず、理解が進むので良い方法だと思う。自分の授業に取り入れたい。

参加者による意見交換の後、孫副委員長・公開授業ワーキングリーダーから総括として、今年度は前期に実施したため、次年度は後期に実施すること、授業の半期化や先修条件の有無によって授業はどう変わるのかという点を、公開授業において検証していきたいこと、GET コースは次年度に完成年度となるため、杉永先生より意見を伺いたいこと、今回の意見交換会で出た意見を今後の授業改善に役立てていきたいことなどが述べられた。また、西嶋委員長からは、今年度は公開授業と授業アンケートを同時に実施したこと、学生の質が変わってきているため、対応方法については検討していく必要があることなどが述べられた。



3 平成30年度 授業アンケート

授業内容や方法の改善及び教育の質の向上を目的とするFD活動の一環として、携帯電話・スマートフォンによる出席確認システムを用いて、学生を対象に授業アンケート調査を実施した。

今年度は、4月に公共学部公共学科を開設したことに加えて、通年科目の多くを半期化するなど教育課程の一部を改変した。これに伴い、学生の学習に対する考え方や学習意欲を把握し、本学の教育活動の推進に活用するために、主として1年生の履修科目を対象として、前期【6月25日(月)～29日(金)；予備日7月2日(月)～6日(金)】と後期【12月3日(月)～7日(金)；予備日12月10日(月)～14日(金)】の2回にわたって授業アンケートが行われた。

アンケートの集計結果については、携帯電話・スマートフォンやパソコン、図書館に配置された集計冊子、各教員に配布する紙ベースの集計結果などで確認することができる。各教員には、その結果を今後の講義や教育等に活用することが期待される。

大阪商業大学 FDニューズレター 第19号
発行日：2019年3月20日
発行：大阪商業大学FD委員会
〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10
Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-6156